

研究ノート

創造性を大切にした世界の保育実践から学ぶもの —イタリア, レッジョ・エミリアの保育実践を通して—

坂 井 旭

The Importance of The Creative Art in Nursery — The Practice in Reggio Emilia (Italy) —

Akira Sakai

I はじめに

“第32回 国際美術教育学会世界大会 (InSEA World Congress in Osaka)”⁽¹⁾が、六年前のニューヨーク大会に次いで、2008年8月5日～9日にかけて、大阪国際交流センターで開催された。本大会では、世界44の国から参加があり、基調講演、招待セミナー、シンポジウム等が行われ、450件の研究成果が報告された。招待セミナーの一つに「幼児教育の国際動向と韓国におけるレッジョ・エミリア教育」の実践研究成果が発表された。

この世界大会に先だち、美術科教育学会の西部地区部会（会場：大阪成蹊短期大学）において2008年7月5日、「イタリア共和国レッジョ・エミリア市の創造性教育」と題して高橋敏之が研究発表していた。ここでの高橋の発表は、始めにイタリア国の国柄と国民性にも言及し、人生での幸福感は、学力・能力・名誉ある職業などとは別の人生観があることを示した上で、今日世界の保育実践で注目視されている一つとしての北イタリア・レッジョ・エミリア市の幼児教育を、自己の見学体験をまじえながら説明した。

このように、美術教育界でのレッジョ・エミリア保育実践の紹介が高まることは、新たな幼児造形教育にこれまでとは異なる視点の必要性が示されているのではないかと考える。

世界におけるレッジョ・エミリアの保育実践が注目されるようになったのは、「世界でもっとも前衛的な幼児教育」として、1991年12月、米国のNews Week誌に掲載されたことが大きい。日本では、日伊両国政府主催による「日本におけるイタリア2001年」としての一大イベントの一環として、東京ワタリウム美術館で「子どもたち100の言葉」と題する特別展が2001年に開催され、レッジョ・エミリアの市立幼児学校および乳児保育所での革新的な保育実践の展示紹介に端を発しているといえる。

これらを契機として、日本の幼児教育研究者、教育者の中で、レッジョ・エミリアの保育実

践への関心が深まり論議されるようになったが、今日、美術教育界でのレッジョ・エミリアの研究紹介は、まだ少ない。

本稿では、各研究者、教育者たちのこれまでのレッジョ・エミリア保育実践における研究内容を参照しながら、レッジョ・エミリア保育実践の様子や、その子ども観、教育観について探っていく。そして、筆者が取り上げてきた「子どもたちのものづくりの意義」⁽²⁾との接点や、子どものもづくり教育観、方向性への指標を明らかにすることを目的とした。

II レッジョ・エミリア保育実践とは何か

子どもの「知育遊び」を唱えたニキーチンは、人間には、注意力、記憶力、見聞きしたものを繰り返す能力、ほとんど機械的にやっつけてのける能力などの「実行活動」とは別に、自分で考え、その解決方法をみつける能力（新しく考える能力）などの「創造活動」が必要であり、「創造活動」では比較対照し分析する能力、ものごとの関係や法則を見つけ組み合わせる能力などの知的能力が求められる⁽³⁾と提唱した。つまり、ニキーチンは新しくものを造り出していく「創造力」をこれら知的能力が総動員されて形づくられていると論じ、彼は子どもたちに実践してきた。

それでは、なぜ就学前の子どもの「創造力」育成が重要なのか。ニキーチンは、脳は7歳ごろには構造的に成人の90%まで造られるために次の5つの課題を掲げた。それらは、① 低年齢 ② 環境を整える ③ (子どもの能力を) 出し切る ④ 自由を与える ⑤ 手助けをする の5つである⁽⁴⁾。そして、ニキーチンはこの五つの条件を満たすために積木遊びで代表される知的創造力育成を実践展開として広めていった。

これまでの幼児教育において「自由遊び」の中から「学び」を体得させるという指導だけではなく、子どもの持つ能力をいかに発揮させ向上を促していくか、そして、どのような環境を与え、どのように支援していくのかは重要な課題である。子どもの人間的な基礎力の育成として、レッジョ・エミリア保育実践の一つの在り方は、これまでの日本の幼児教育の見方、在り方を転換する指標の1つとして参考になると考える。

レッジョ・エミリア保育実践は、北イタリアの一都市であるレッジョ・エミリア市における公立の3～6歳児の幼児学校と0～2歳児の乳児保育所において行われている。

レッジョ・エミリアの創造性を重視した保育実践の特徴は、ペダゴジスタという保育者と各幼児学校に1名ずつ配属されたアトリエリスタという芸術教師によってなされている。幼児学校では25名の子どもたちに対して二人のペダゴジスタがかかわり、その内の1名は保育活動支援に立ち回り、もう1名は子どもたちのプロジェクト活動での個々の会話や行動を様々な方法（テープ、写真、ビデオ他）によって活動記録や観察記録を行う。そしてそれらを「ドキュメンテーション」という独自の記録編集を行い、個々の子どもたちのファイルを作成し、開示している。この「ドキュメンテーション」されたファイルによって、子ども一人ひとりの学び

成長していく過程が、その子ども自身や親などによって確かめられるようになっていく。

レッジョ・エミリアの子どもたちの活動方法は、3～5人のグループに分かれてのプロジェクト学習方法をとっている。グループの子どもたち自身の話し合いによって活動テーマは決められ、グループの共同活動を展開していく。その方法は幼児の創造性が発揮しやすい造形表現方法をとる際のアトリエリスタ（芸術講師）、子どもたち自身が活動を先動していく際のペダゴジスタ（保育者）は助言者や支援者としてかかわるのである。

アトリエリスタは、より適格に表現を促す様々な造形方法を助言・指導し、子どもたちの創造的な能力を引き出せるように、また同時に協働活動によって相手の気持ちを思いやる能力を養いながら、子どもたちをダイナミックで精神的に豊かな創造的造形表現へと指導する役割を荷っているのだ。

幼児学校の施設の特徴は、イタリア特有のピッツア広場が施設内に広がり、そこを中心に各教室が周りに設置され、各教室にはアトリエという部屋が施されていることである。そこには様々な色や形の素材、豊富な材料が備えられている。さらに、室内のいたる所に子どもの創作作品が展示し飾られている。そして、子どもたちの創造的活動の姿や創造活動の結果として生まれた表象された絵画や造形物が、子どもたちのエネルギーとして伝わってくる設備がなされている。

次にレッジョ・エミリアの創造的な活動事例を示してみた。

「影とあそぶ」というテーマについての展開である⁽⁵⁾。

子どもたちの「影」に対する各々の想いは次のようになる。

「影はそこにあるけど、つかまえないんだ」「その影の形は1つだけど、あと何百もあるんだよ」「人について回るみたいだけど、気が向いたときだけなのさ」「自分の都合で出たり引込んだりするんだよ」「影は夜の一部だけど、昼の一部でもあるんだよ」そしてまた「(影は)僕たちがからだの中にいつも持っているもので、それが僕たちの足から出てくるんだよ」「(影は)太陽のせいで朝生まれて夜になると死んじゃうの」

ここで発せられたこれらの言葉は、実際に「影とあそぶ」の実験の前に子どもたちが教えてくれた各々の想いである。そして、それらの言葉から、子どもたちは多様な観念を生み出す能力があり、影の微妙な現象の意味を示し解釈を与えるすばらしい言葉や思考を選択する能力があることがわかるとされている。(傍点筆者)

それでは、子どもたちの「影とあそぶ」の実験の様子はどうかであろうか。

子どもたちは、実験前の推理から様々に試みようとした。四人によるプロジェクト活動のドキュメンテーションの様子は次のようであった。

「ぼくの影はいまどこにあるの？ ぼくのはきっと、ピーターパンの影みたいに逃げたりしてないよ。ほら、ここにあった」先生「影を追い払うことってできるかしら？」「その子の影を見えなくするには、その子がどこかにいなくなっちゃえばいいんだよ。(男の子が影を

見えなくするために、地面にうつぶせに横たわっている—写真)」「小石をたくさん、うんとたくさん、かぶせちゃえ。(立っている子の影に、三人の子が小石を影の上に乗せている—写真)」「影はどうしても隠れないよ。(影に小石を乗せたのに、小石の上に影が映っている—写真)」「じゃあ、シートで隠したらどう? 持ってこようよ。(小石の上にある影に三人の子がシートをかぶせようとしている—写真)」「隠れないよ。ほくの影はここにあるし、ヴェロニカのもあるよ。(シートの上に二人の子の影が映っている)」そしてさらに、子どもたちは、「影とあそぶ」実験から、次のような会話も発せられている。

「太陽が人間やものところに来たら、そこで止まってしまうのよ。だって人間やものがすっかり閉まってたら、太陽は通り抜けられないからよ」「そうさ、だって太陽が何かを通り抜けられないとき、影ができるんだから」「それじゃ、透明人間にはたぶん影はできないね」

ここには、子どもたちがしたことばや活動中の写真、その時に描いた図画によって、「影とあそぶ」プロジェクト学習から学びや成長の過程が再現されている。プロジェクト学習は、子どもの様々な能力の成長や学びの研究の場があり、高度な創造力の育成を立証してみせているのである。

グッド・ベッターは「影とあそぶ」での子どもの学びは、想像力がかきたてられること、子どもの心は原始のように影の世界を歩き回り、そこでいろいろな創造を行っていること、影は並はずれた教育の機会を提供していること、つまり影は子どもの中の自然発生的な好奇心を高め想像力がかきたて子どもの成長途上の知能能力を訓練するだけでなく至るところに偏在し、石や砂や水や「鉛筆と紙」よりも潤沢していること、そして、影は他のものより効果的にやってみたい、実験してみたいという子どもの要求に充分応えられる対象物である⁽⁶⁾、と協調している。

子どもたちの「影」の実験から、さらに様々な発展的活動が発せられている。子どもたち四人が連なり重なってできるおもしろい影の形を発見し、そこに生まれた新しい影づくりから、さらに想像力が高まっていく。影をつくる創造力の学びへと進化する勢いは、グッド・ベッターが述べたように、まさに「影」は、知的能力を喜びながらいっそう高めていく要素となっているのである。

子どもたちの「影とあそび」での高まりは、ペダゴジスタやアトリエリスタたち大人の支えが効果的に発せられているためであると考えられる。しかし、このように「影とあそび」が子どもたち四人の学びの場としての高まりを持ったことは、「影」というテーマが、子どもたちのコミュニケーションの場から発せられたことが大きな要因であったと言わざるを得ない。子どもたちの興味、関心の中から生まれたテーマゆえに、それをみのがさない側面からのペダゴジスタ・アトリエリスタたちの助言、支援とあいまって、このプロジェクト学習で、子どもたちが生き生きと挑戦への意欲をかりたてることができたのである。ここに、レジジョ・エミリア保育実践の特徴がある。

このような子どもの能力を引き出す試み（子どもたちにとっては、時に「あそび」の延長にある）は、レッジョ・エミリアの幼児学校に限ったことではない。至るところでの子どもの「あそび」の中で、常に生まれているのではなかろうか。しかし、レッジョ・エミリア保育実践では、ドキュメンテーションによって四人の子ども（「影とあそび」では）一人ひとりのことばの交わり合いや行動が詳細に記録されるので、四人の子どもたちがその行為（「影とあそび」）の中で、四人の協働力によって何を学びかちっているのか、子どもの成長過程をしっかり受け留め、次のステップへの連続性なる能力の発展を促すように支援を助長できることが、最大の特徴である。まさに、子どもたち一人ひとりが社会集団として学ぶことによって、人間として豊かに生きていく基盤を学ばせ、自ら考え、創り出していく能力を獲得している。

Ⅲ レッジョ・エミリア保育実践を支えるもの

直接的には、レッジョ・エミリア幼児学校では、1クラス25名に対して二人のペダゴジスタが配属され、一人は幼時の活動支援担当、一人はドキュメンテーションへの記録を主に担当する。創造的造形表現の指導対応では、各幼児学校に一人のアトリエリスタが配属され、創造的活動への指導体制は充実している。特に、ドキュメンテーションの制作や作品などの展示には、ペダゴジスタたちとアトリエリスタの前向きな協力体制とおしめない行動力に支えられており、彼らの存在意識は大きい。そして何よりも、幼児学校の施設そのものが子どもたちの想像をかりたてる場であり、創造的活動を發揮しうる環境づくりがなされている。施設の中のアトリエには、子どもの想像性・創造性をかりたてる様々な素材と道具が備えられているが、ここへの素材供給は市とタイアップした施設、リサイクルセンター（レミダ）の存在は大きい。レミダのスタッフには、アトリエリスタ経験者もあり、リサイクルセンターに送られ、様々な分別されたものの中から幼児の想像性、創造性をかりたて、扱いやすいものを選別し、各幼児学校、乳児保育所に日常的に供給している。例えば、キャップやビン、ロール芯、機械部品のボルトなど様々なものに対しても色や形のたのしさ、おもしろさなど子どもの興味を引きそうなものへの分別提供がある⁽⁷⁾。

子どもたちの保育実践への経費に対する支援体制をみてみると、レッジョ・エミリア市では、市予算の10%以上が幼児学校、乳児保育所の活動に当てられている。市の教育予算は実に全予算の40%が組み込まれている。（レッジョ・エミリア市は、「子ども、教師、保護者と、学校が設置されている地域との関係システム」が重視され、その方針は、「子どもへの投資は、基本的な文化的社会的投資である」という教育哲学による⁽⁸⁾）。それは、市民一人ひとりが何如に教育に関心が高いかもうなずける。

昨今のイタリアは、日本以上に少子化が進んでいる。国民の子どもに対する関心は、学校まかせではない。学校との親密さは日本の比ではなく、レッジョ・エミリアの幼児学校では、親は、いつでも自分の子どもやグループの活動の記録・ドキュメンテーションを開架から手に取ってみることが出来るし、質問、意見が交わせることが出来るのである。

レッジョ・エミリア市の一大イベントは、レミダ・デー（リサイクル素材を使って作品発表し合うイベント）として5月に開催されている。このレミダ・デーでは、リサイクルセンターのスタッフが中心となって、子どもから大人、老人まですべての市民がこのプロジェクトに参加し、共有し融合していくのを目指す。町全体が気持ちを1つにして、作品を作り上げる。例えば、2002年は、「町」という課題。子どもも「町」をどう捉えるか、制作プロジェクトの一員として扱われる。子どもたち自身も実際に町を観察し、感じ取った成果をリサイクル素材を用いた作品づくりに加わる。完成した作品は町中に展示発表される。表現も多様で、イベント期間中、町中がファンタジーあふれる作品で埋めつくされる。2005年には、「自転車」がテーマ。子どもたちの参加には、「理論と実践」が自転車の両輪関係にある大切さを込められ、バランスよく乗れるように学んでほしい気持ちが根底に込められている⁽⁹⁾。

このように、レッジョ・エミリア市では予算面でも、地域市民の思いも、レッジョ・エミリア保育実践を側面から支援する環境下にあり、教育環境のレベルの高いことがうかがわれる。

IV 子ども観について

世界の国々での「子ども観」については2つの観点がある。その国がどちらの「子ども観」をとるかによってその国の保育政策は異なってくる。

1つは、将来への準備、学校への準備とする「準備期の子ども観」である。これは、日本の一般的な「子ども観」である。

もう1つは、「子どもは、今とともに生きるひとりの市民」という「子ども観」。未来の見返りを当て込むものではなく、今ここに生きている子どもたちそのものが大事だとする「市民としての子ども観」である⁽¹⁰⁾。

レッジョ・エミリア市での「子ども観」は、まさに「市民としての子ども観」である。レッジョ・エミリアでは、欧米での先がけとして戦後まもない時期から一大転換し、長期に渡ってこの「子ども観」を保育実践の場で築きあげ立証してきた。そして、今日世界的に注目を浴びる保育実践となっている。

「市民としての子ども観」によると、子どもの発達は個人的な営みではなく、社会文化的な活動での営みによって発達が促がされており、子どもは生まれた時からすでに地域社会の中で大人たちとの生活に能動的に参加できる「一人の市民」としての存在である。これまでの未熟な存在という子ども観から脱却して「多くの才能性を豊かに持った人間」という子ども観への転換である。そして、子どもは、大人や他の子どもたちとの結びつきの中で生き、学ぶ意欲と能力を備えた有能で力強い存在であり、実に多様で豊かな可能性を持った人間である、とする「子ども観」である⁽¹¹⁾。

しばしば大人は子どものこれらの可能性ある豊かな能力と触れ合って、改めて力強い生命力を学びとっているといっても過言ではない。子どもは、生きる力の源の1つとしての大きな存在がある。それゆえ、レッジョ・エミリア保育実践では、子どもたち自身の「今を生きる知恵」

として発せられる創造的な想いに注目し、そこからペダゴジスタの支援によって実践テーマが確立し展開していく。子どもをあくまでも主体的な存在として導くことによって、子どもの学ぶ意欲、主体的に考える力を養う環境を提供し続けている。

V レッジョ・エミリアの教育観

「子どもが『なぜお月さまがあるの』と尋ねたら、科学的な答えで応じてはなりません。子どもに『あなたはどう思う？』と問い返してください。『あなたは自分のこころがあり、自分自身の解釈があるはずだし、私にはあなたの考えが大切なの』⁽¹²⁾」というペダゴジスタであるカルリナ・リナディのことばが、レッジョ・エミリアの教育観を端的に言い当てている。

ここでは、子どもの「自分の考え」を持つように奨励されているだけでなく、「自分の考え」を持つこと自体の大切さに気づくように学ばせているのである⁽¹³⁾。子どもは「自分の考え」を持つことによって、仲間や大人と対等な立場で協働するプロジェクトの一員になる。

それでは、この「自分の考え」を育む教育手だてはどこにあるのだろうか。

レッジョ・エミリア保育実践の特徴のひとつは、「プロジェクト学習」の中での幼児たちのテーマ選定に至るまでに、子どもたちの話し合う時間を惜しまないことである。その話し合いの中で子ども同士の相互の助言が生まれたり、仲間同士の批評を当たり前として受け留められる態度が養われる。これらを時間をかけて、子ども同士で体験させ、解決させるところから育てようとしているところにある。ペダゴジスタたちは、制作が一段落したときなどに制作者である子ども一人ひとりに作品の長所ばかりでなく、短所と思われるところも含めて自己を評価させ、それを仲間聞いてもらう場面を作ったり、仲間同士の批評を当たり前のこととして受け留められる態度を相互関係で培ってきた⁽¹⁴⁾。その結果子どもたちは、大人たちとのかかわりからも、共に生きる知恵を学びとっていくことができるようになる。

次に、共同体の中で「子どもの創造性教育」が持つ意味については、レッジョ・エミリアの教育主事、セルジオ・スパジャーリは非常に高い認識を示している。

「これまでヨーロッパの文化は、個人の独立性と共同体を分けて考えてきました。私はこの二つのコンセプトを対立する概念としては捉えていません。ある共同体の中の個人は、その共同体に『従属』しているとは限りません。人は共同体に入っても自由でいられるのです。独立と共同体は交じり合うことは可能なのです。子どもたちの『自由な思考』『自由な行動』『自由なアイデア』は、共同体にとっても重要で大きな価値を生みます。子どもは一人だけでも家族だけでも生きていけないのです。家族にとっても他の家族と接することが大切なのです。人は、『他者との出会い』『他者との対話』によって初めて成長できるのです⁽¹⁵⁾」

レッジョ・エミリア保育実践の背景には、学校の質の低下いわゆる教育の危機があった。行政の関心の薄さと教育予算削減、さらに、少子化であり、子どもたちの多くが悩みを抱えてい

るような環境だったのだ。しかし、子どもたちは、健康で、知的で、素質に恵まれ、学ぼうとする意欲に満ち、好奇心と感受性に富み、柔軟で適応しやすく記号言語に興味を示し、自分自身に向かうことに優れ、友情を渴望していたからこそ、レッジョ・エミリア保育実践が生まれたのだった。

レッジョ・エミリアの人々は、「幼児の学ぶ権利を保障する」ことに力を注いだ教育者たち：ピアジェ、デューイやモンテッソーリなどから多様な教育思想を学び影響を受けた⁽¹⁶⁾。そして、「市民としての子ども観」、幼い子どもであっても「自分の考え」を主張し合える知的人間性の育成観、人間として一生を豊かに過ごす人間観、それらをどう育み、教育の場で築き、環境を与えていくかという彼らの思想は、レッジョ・エミリア保育実践においてしっかり基盤として存在していく。

VI レッジョ・エミリアの創造性を大切にされた保育実践とは

レッジョ・エミリア保育実践は、なぜ、保育実践の主な目標に「創造性」を据えたのであろうか。

レッジョ・エミリアでは、子どもたちが音を目で見える絵にし、目で見えるものを奏でる音にすることが、新しい見解と洞察をもたらし、子どもが発明家となる力（創造性を発揮する力）となる。そこでは、言語表現・音楽表現・造形表現・身体表現が、それらの境界をとびこえて自由に往き来する⁽¹⁷⁾。幼い子どもにとってこの創造活動そのものが自由で楽しく、しかも自己の想像力をいかに発揮し、相手に伝えやすい世界観を持てるからである。幼児にとって自由に組み立てられる「イメージづくり」は幼児にとって全能力を活かしきろうとする。その活かしきろうとする時、新たな発想つまり「創造力」が発揮され、幼児はさらに変容していく。その時、周りの大人、バダゴジスタやアトリエリスタの励ましによって、いっそう、幼児は自分自身に「自信」を持ち、さらに前進していく。その「自信」は、幼児自身の「創造性」の発揮によって認められたのである。「創造性」は幼児にとって、知識を獲得する時、情感を味わう時、イメージをめぐる時、様々な行為の中で働き、高めていく手だてとなる。

「創造性は、大人が前もって定めた教育方法に束縛されず、問題状況の観察者になり、解釈者になった時、力を発揮する」し、「知性的で表現的な活動が可能性を多文化し、総合することに教師が確信すればするほど、創造性は想像力やファンタジーと親和な交流を実現する⁽¹⁸⁾」という。「創造性」は、誰にも束縛されず、活動当事者本人にとって、自由に豊かにいっそう自己力を発揮することになる。そこには、様々なファンタスティックな表現世界として、知性を総動員して芸術的表現をかもし出す。創造する行為は、知性と表現を結びつける役割を果しており、そこに教育的意義がある。

レッジョ・エミリアの創造性を重視したプロジェクト学習の方法や意義については、「子ども

の五感の訓練は、感受性を育てることによって知的活動の統一的要素としての『イメージ』を言語以外の表現手段、つまり言語よりも単純で明快なコミュニケーションの道具である『図象表現』を積極的に活用する広い意味での「アート教育」によって認識は深まるとしている⁽¹⁹⁾。

レッジョ・エミリアの子どもたちの保育実践を造形芸術、視覚芸術として捉えた高橋敏之もまた、レッジョ・エミリアの教育実践を「アート教育」「創造の教育」の成果であると唱えている⁽²⁰⁾。

VII 結び

ローリス・マラグッツィ（レッジョ・エミリア保育実践創始者）の指摘した学校の質の低下と教育の危機、家庭環境の弱体化は、将来を担う子どもたちの環境をますます混沌とさせている。そういう社会情勢であるがゆえに、学校の在り方が重要となる。学校という立場で、子どもたちの豊かな生命力を、子どもたちに備わっている能力を総動員して、「子ども一人ひとりの存在」を高め、子ども自ら意識し、能動的に行動的に行動できる人間力を、幼い時から育てようとする事例を、レッジョ・エミリアでは実証してみせている。そこでは、「個」ではなく、「仲間」との共同体を通して、しかも、幼児が発揮しやすい「想像力」「創造力」をつける「アート」の活動実践を目標に、「人間力の基盤」を構築している。

教育の危機は、日本でも同じである。仲間との協働を通しての「自ら考える力」や「創造力」の育成に、日本の教育でも力を注いできた。「総合学習（総合的な学習の時間）」がそれにあたる。そこでは、「自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考える」、そして、「主体的、創造的、協同的に取り組む態度」を育てるのがねらいである。昨今では、子どもの学力低下が指摘され時間数は減少したが、根本の教育的見地は失われてはいない。

筆者は、これまでに、「子どものものづくり」に「人間力の基盤」の高まりを見い出してきた。「子どものものづくり」は、能力（知）を総動員して、「創造力」を発揮する。子ども自身が、「計画・立案・制作」への過程を経て、自分の能力、スキルをいっそう向上させ、「自信力」「創造力」を高めていることを立証してきた。「自信力」「創造力」発揮の「子どものものづくり」現場では、「スペース」「時間」そして「人的環境」の必要性を指摘した。それは、レッジョ・エミリア保育実践でのアトリエを備えた「スペース」であり、子どもたちが十分話し合い、活動できる「時間」を持つことであり、グループとしての仲間やバダゴジスタ、アトリエリスタたちのいる「人的環境」と、呼応する。

幼児に限れば、日本でも安部幼稚園で実施した「子どもと自然との触れ合い」の中で、「自ら発見し、自ら学び、自ら考える」保育実践⁽²¹⁾とも呼応する。

しかし、レッジョ・エミリアの大きな特徴は、「市（City）」という地域としての共同体が、

幼児を一人の大切な市民（「個」）として認識しており、個々の子どもに対してともに育つ協働力としての一員である環境が築かれていることである。そして、多くの市民一人ひとりが、時として、創造性を発揮できる「アート」という手立てを通して、共同体を高めているという事実（世界観）がある。しかも、そのことによって人間性をお互いに高め、認め合っている。そういう地域の人々や、ペダゴジスタ、アトリエリスタたちの支えによるプロジェクト学習いわゆるそれぞれの子どものドキュメンテーションのファイルを持ち、「自分で考える」力を育てるレジヨ・エミリア保育実践が、世界に注目される要因である。そこに、日本の教育者、行政にかかわる人々、指導的立場の者などは、子どもを育てる環境を再構築する上で学ぶ必要があると考える。

注

- (1) I n S E A = International Society for Education through Art 3年毎の世界大会で2005年は中止されている
- (2) 坂井旭 「子どもたちのものづくり」 愛知江南短期大学紀要 第33号 P 109-125 2004
坂井旭 「子どもたちのものづくり パート2」 愛知江南短期大学紀要 第34号 P 43-56 2005
- (3) ボリス・パープロヴィチ・ニキーチン 訳・匹田軍次 「ニキーチンの知育遊び」 P 48-49 暮らしの手帖社 1988
- (4) 前掲載書 P 53-58
- (5) 著作権者・レジヨ・エミリア市乳児保育所と幼児学校 訳・田辺敬子 辻昌宏 木下龍太郎 『子どもたち100の言葉』 P 118-123 学習研究社 2001
- (6) 前掲載書 P 120 P 123
- (7) 石井希代子「『レジヨ』を支えるリサイクルセンター」 現代と保育 69号 P 58-59 ひとなる書房 2007.1
- (8) 林悠子 「レジヨ・エミリア・アプローチ」 社会問題研究 第57巻2号 P 171 大阪府立大学人間社会部 2008.3
- (9) (7) 掲載書 P 60-66
- (10) 大宮勇雄 「レジヨ・エミリアやニュージーランドの保育者は『子ども』がどのように見えていたのだろうか」 現代と保育 69号 P 7-8 ひとなる書房 2007.1
- (11) 前掲載書 P 10 P 14-17
- (12) (13) 木下龍太郎 「レジヨ・エミリアの保育実践における探求・対話・関係性」 保育問題研究 203号 P 26-27 新読書社 2003.1
- (14) 前掲載書 P 31
- (15) 前掲載書 P 36
- (16) 豊泉尚美 「保育における『プロジェクト活動』について」 日本女子大学紀要 家政学研究科 人間生活学研究科 第11号 P 2 日本女子大学 2005.3

- (17) 高橋敏之 「イタリア共和国レッジョ・エミリア市の創造性教育」 美術科教育学会 2008年度第1回
西地区部会 資料 P iii 美術科教育学会 大阪成蹊短期大学 2008.7
- (18) (19) (16) 掲載書 P 14
- (20) (17) 掲載書 P iii
- (21) 坂井旭 「幼児教育としての『表現』(2)」 江南女子短期大学紀要 第26号 P 60-61
江南女子短期大学 1996